

所報



巻頭言

「体験」と「言葉」を意識した道徳教育

京都市総合教育センター副所長 柴原弘志



「日本は疲れています。日本は自信をなくしています。日本人は彷徨い続けています。」これは、平成14年12月に示された文化審議会答申に盛り込まれている「大地からの手紙」という詩の冒頭である。私は、この部分をよく次のように読み替え、そのあとを続ける。

「日本の子どもは疲れています。日本の子どもは自信をなくしています。日本の子どもは彷徨い続けています。戦後、ものを作り、ものを売って高度経済成長を果たした日本は、この半世紀を爆走しながら、富の代わりに何を手放し、何を失ってきたのでしょうか。(略)おなかをすかせた心に尋ねてみましょう。「欲しいものは何ですか?」「それは、この目に見えるものですか?」と。

今日、「豊かな心」の育成、その充実が改めて強く求められている。「心の教育」、それはカウンセリング的アプローチ、生徒指導的アプローチ、感性・情操教育的アプローチ等の取組をとおして、心の安定を保ち、その成長を支えようとするものであり、そうした各側面からの取組が総合的に進められることで、いま求められている「心の教育」は全体として形づくられていくものといえよう。

ただ、昨今の我が国の在り様を見るに、中でも私は、「豊かな心」の育成を考えるうえで忘れてはならないもの、それは道徳的価値の側面からとらえた「心の教育」、

すなわちその人の「心」の大きな部分を占める「道徳性」のはぐくみだと考えている。正しい理解に立つ道徳教育の充実こそ、最重要課題ではないだろうか。

平成18年2月に示された中央教育審議会教育課程部会の「審議経過報告」によれば、今回の教育内容等改善へのキーワードは「体験」と「言葉」だという。

本来、道徳教育を進めるうえで、子どもたちの「体験」から遊離した、あるいは子どもたちの「体験」を視野に入れていない取組は、教育的効果を期待できないばかりか、本質的には存在し得ないものである。

しかしながら、「体験」だけでも十全なる道徳性のはぐくみにはつながらないであろう。

「体験」を基盤にもたない認識は、単なる物知りになりがちであり、「言葉」による知的な省察や意味付けがなされない「体験」は、独断的なものに陥りがちで、真に生きてはたらく力として、子どもたちが生きていくことを支える道徳性とはなり得まい。

「体験なき知見」、「知見なき体験」双方がかかえる不十分性という認識に立つとき、「道徳の時間」の道徳教育上の意義とその在るべき姿が、改めて明確になってこよう。

子どもたちの「体験」をより豊かなものにし、その「体験」にしっかり根ざした「道徳の時間」をより充実させることをとおして、子ども一人一人の心に、真に届き、響く道徳教育を展開していきたいものである。

もくじ	○巻頭言 P.1	○研修講座だより② P.4
	○指導主事研究③ P.2	○内部Webページの紹介・コラム P.5
	○指定都市共同研究 P.3	○教育センターひろば P.6

豊かな心をはぐくむ道徳の時間の指導法に関する研究

教育センター主任指導主事(事)主任 堂道 和雄
 教育センター指導主事 谷田 増幸
 教育センター指導主事 清水 剛

教育センターでは、他者を思いやる温かい気持ちをもつことや、望ましい人間関係を築くことなど、「豊かな心」を、子どもたちにはぐくむことが喫緊な課題と考え、「豊かな心」をはぐくむことの根幹として位置付けられている道徳の時間の指導法に関する研究を行いました。具体的には、自分の思いや気持ちを表出したり、話し合うための基礎資料としたり、気持ちの変容を振り返ったりすることなどを目的とした書く活動に視点を当てて研究を進めました。

道徳の時間における書く活動の意義を教師の立場から整理すると次のようなまとめ方が考えられます。

- 一人一人の子どもの思いや考え方を把握し、個別的な指導につなぐことができる。
 - 個に応じた指導
- 発言力を持った子どもを中心とした話し合いになりやすい授業に変化を与え、多様な子どもの思いや考えを取り上げることができる。
 - 個を生かす指導
- ねらいにせまる書く活動を指導過程の中に適宜組み入れることにより、道徳の時間における評価の活動を充実させることができる。
 - 評価の観点の明確化

書く活動の意義をふまえ、本研究は指導過程に即して、書く活動に着目したモデルを示しました(図1)。

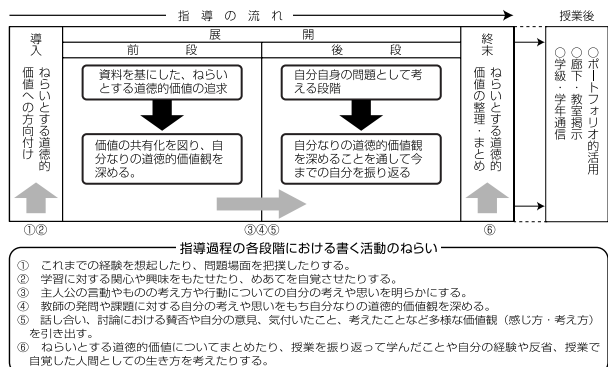


図1 道徳の時間における指導過程と書く活動の位置付け

図1で示した道徳の時間における指導過程に書く活動を位置付けたモデルに基づいて実践し、実践事例の分析・考察を行いました。

(1) 実践事例1—小学校(第5学年)—

A小学校での道徳の時間の指導過程における書く活動の位置付けは次のとおりです(図2)。

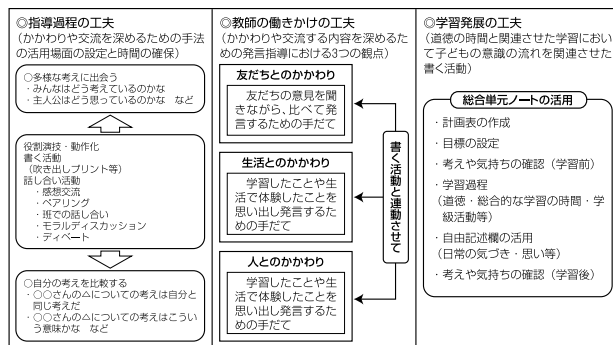


図2 道徳の時間の指導過程

A小学校では、全児童を対象として7月と12月に、道徳の時間についてのアンケートを実施しており、「道徳の時間は自分にとってためになりますか」という項目については次のとおりでした(図3)。

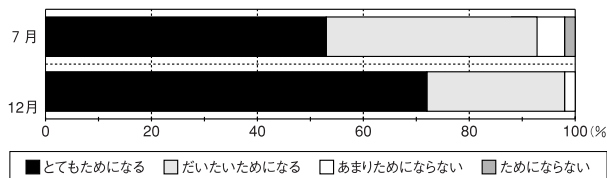


図3 「道徳の時間は自分にとってためになりますか」

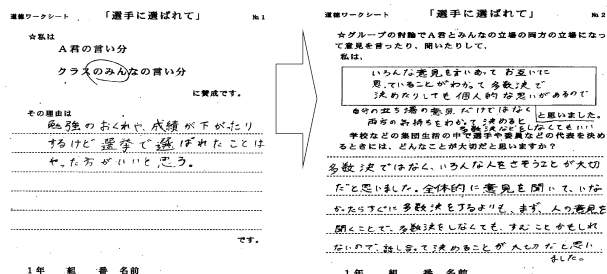
(2) 実践事例2—中学校(第1学年)—

B中学校では道徳の時間にロールプレイ、ディベートと書く活動を位置付けました(表1)。

表1 具体的な指導法の工夫・内容

指導法	内容
A ネームプレート	個人名が入ったマグネット付きのプレートで、黒板上に示された座席の上に貼り付ける。そのことにより、自分の判断の度合いを他者と比較しながら確認することができる。
B 意思表示カード	二色のカードを生徒に配付し、自分の意思を表示させることにより、全員が主体的に自己の意思を表出することができる。
C 討論	登場人物の行為について「賛成・反対」の立場から討論を行うことにより、話し合いを活性化させることができる。
D ロールプレイ	生徒と教師、あるいは生徒と生徒がロールプレイを行うことにより、登場人物の心情理解を深めることができる。
E ロールプレイ・ディベート	グループでの話し合いの時、あるテーマについて異なる二つの立場に分かれて話し合い、途中で立場を交代してさらに話し合いを行う。異なる立場を模擬体験することにより、生徒の考えを深めることができる。
F 話し合い	小グループでの話し合いを授業に取り入れることにより、自分の意見を分かりやすく伝える力や、お互いの意見を聞く力を養う。
G 「書く」活動	グループでの話し合いや自分の意見を言う前後に、ワークシートに「書く」作業を取り入れることで、自分の考えを持ち帰り、振り返りやすくなることを容易にし、深めることができる。

ロールプレイ、ディベートと書く活動によって、討論後、他者の視点を得た生徒自身が、より大きな枠組みの中で課題解決を図り、よりよい価値を選び取るとする記述を読み取ることができました。



詳細については、各校・園に配布済みの『研究紀要第26号』にまとめています。また、教育センターの内部Webページでもご覧いただけますので、ぜひご活用ください。

指定都市共同研究

教育の確かな営みを推し進めていくために
—今を生きる子どもたちの姿や思いを探る—

教育センター指導主事 胤森 裕暢

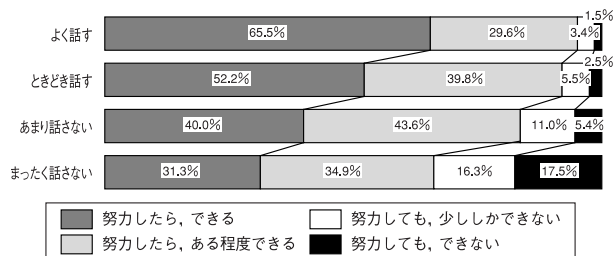
全国の政令指定都市（現在15都市）が加盟している指定都市教育研究所連盟は、過去40年間以上にわたり喫緊な教育課題を研究主題に掲げ、その解明をめざして、政令指定都市に居住する子どもたち（小学校4年生、6年生、中学校2年生）の姿（実態）と思い（意識）について調査研究を行ってきました。

第14次の共同研究（平成15～17年度）では、「教育の確かな営みを推し進めていくために」という研究主題のもと、子どもたちの①「家庭・地域社会における生活」、②「家庭・地域社会における学習」、③「学校における生活」、④「学校における学習」という四つの視点で調査研究を行いました。さらに今後の研究の柱には経年比較を加え、継続的に子どもたちの姿と思いを追究していくことにしました。

第14次共同研究の結果は、報告書『教育の確かな営みを推し進めていくために』として今春に各学校・園に配布させていただきました。ここでは、報告書の中からいくつか特徴的な結果を紹介します。

(1) 家庭での会話が子どもにもたらすもの（「第1章 家庭・地域社会における生活」より）

「自分の可能性に対する認識」と「家の人との会話の機会」



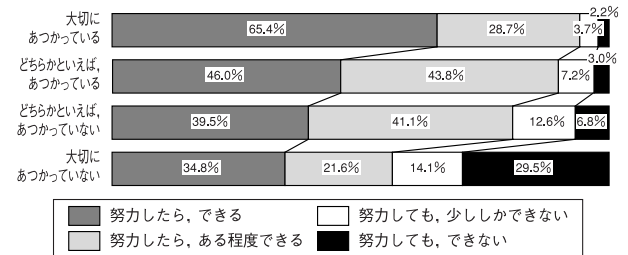
このグラフからは、家の人との会話の機会が多い子どもほど、学校での学習について「努力したら、できる」、「努力したら、ある程度できる」と思う傾向があることがわかります。この結果の他に、家の人との会話の機会が多い子どもほど、学校生活に満足する傾向や、授業の理解も高くなる傾向がみられました。生活の基盤である家庭が、会話を通して子どもの思いなどを受けとめることで、子どもは自己の可能性を信じるようになることができると考えます。

学校は、子どもがより自己の可能性を信じていることができるようにする手立てとして、家庭にこの結果や子どもの学校での様子を細やかに伝えて、家族の会話を

啓発してみたいかがでしょうか。

(2) 公共物の扱いは子どもの心の状態を表すバロメーター（「第3章 学校における生活」より）

「自分の可能性に対する認識」と「公共物の扱い」

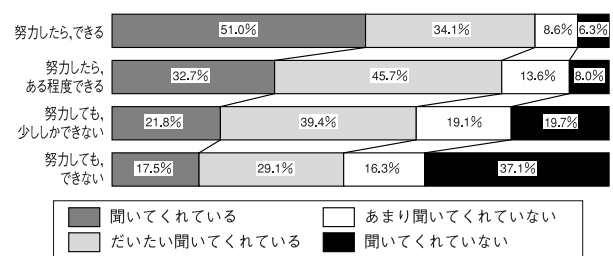


このグラフからは、そうじ道具などみんなで使う物（公共物）を「大切にあっていない」と思っている子どもほど、学校での学習で苦手なものは「努力しても、できない」と思う傾向があることがわかります。ただし、公共物の扱いは、子どものその時々心の状態にも左右されています。

われわれ教師は、公共物の扱い方が気になる子どもに対して注意するだけでなく、学習の悩みなどに耳を傾け、自己の可能性が自覚できるよう支援することも大切なのではないのでしょうか。

(3) 教師の姿勢が子どもにもたらすもの（「第4章 学校における学習」より）

「先生は話を聞いてくれるか」と「自分の可能性に対する認識」



このグラフからは、学校での学習について「努力したら、できる」と思う子どもほど、学級担任の先生は自分の話を「聞いてくれていると思う」と答えていることがわかります。

子どもが自己の可能性を信じるようになるために、われわれ教師には、家庭とともに、まず、よい聞き手となるなど、しっかりとかわることが求められているのではないのでしょうか。

報告書には、他にも多くの調査研究の結果を載せています。教育センターの内部Webページでも全文を紹介していますので、是非ご覧ください。

研修講座だより②

～ 9月までに実施した研修(一部)の概要をご紹介します。～

危機管理に係る研修講座

主 題 「子どもの安全確保と安全指導の在り方」

講座の概要

本年度の「危機管理に係る研修講座」は、次の内容・日程で実施しました。

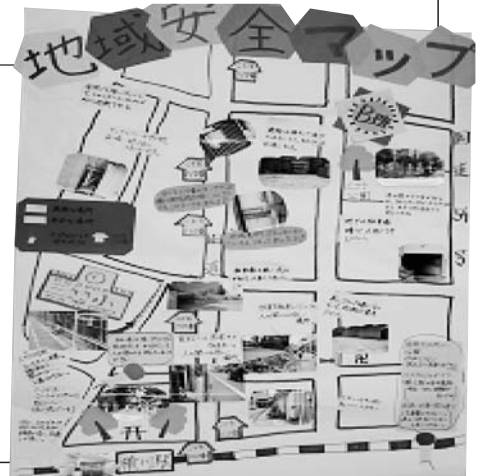
第1日	講義・演習	「子どもの安全を確保するための安全管理と安全指導」 寺本 達志 [広島市教育委員会学校教育部企画課学校安全対策担当指導主事]
第2日	講義・演習 実践発表	「地域安全マップの役割と作製の実際」 倉田 礼爾 [広島県民生活部子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム 主任企画員] 寺本 達志 [広島市教育委員会学校教育部企画課学校安全対策担当指導主事] 西岡恵美子 [広島市立八木小学校 教諭] 檜山 枝美 [広島市立東原中学校 教諭]



ここでは、第2日の内容をご紹介します。

午前は、地域安全マップの効果や作製の手順、ポイントなどについて研修しました。その後、実際に横川駅周辺の「入りやすく見えにくい場所」について、6～7人のグループに分かれてフィールドワークを行いました。

午後からは、調査結果をもとにして、グループごとに地域安全マップの作製を行いました。受講者のみなさんは、実際にフィールドワークを行い、マップを作製することで児童生徒の視点に立ったマップ作製上の留意点について考えることができました。



特別支援教育講座

主 題 「発達障害のある子どもとの豊かなコミュニケーション」

講座の概要

講師 大阪府立大学 助教授 里見 恵子 先生

特別支援教育の理念や考え方が各学校において少しずつ浸透しつつあり、LD、ADHD、高機能自閉症といった発達障害の子どもたちの理解が進んできているようです。しかし、このような子どもたちの中には、会話において右のように文脈に合わない言葉を使うなど、コミュニケーションの難しさを示す子どもが少なくないようです。

そこで、「発達障害のある子どもとの豊かなコミュニケーション」というテーマで、大阪府立大学助教授の里見恵子先生を講師としてお迎えしました。当日は、中国新聞ホールで約400名の先生方が受講されました。講義では、自閉症等の広汎性発達障害の子どもがコミュニケーションを困難としている理由や、教師の適切な援助等について、子どもとの実際のコミュニケーション場面のビデオを基に、分かりやすく整理して示していただきました。

A君：「本を忘れたので、貸して下さい。」
先生：「ちょっと待ってね。」
A君：「(早く貸してほしいという意味で) さっさと貸して下さい。」

なぜ、コミュニケーションが難しいのか？

- 他者の視点でものごとを考慮することができない、または、できにくい。
 - 文脈を考慮して発話を理解することができない。
 - こだわりがあるため、自己中心的な話題に偏る。
- などが考えられる。



会話が起きている「今、この時」に援助する！

- 主語を明確にして話す。
- 間接発話を使わない。(机間指導中に「ここあってる？」ではなく、「ここ答えが違うよ。」と直接発話をする。)
- 不完全発話を使わない。(文脈から判断して分かって思っ「これは？」と発話するのではなく、「これは誰の○○なの？」と完全発話をする。)
- 状況や文脈をきちんと説明する。
- はっきりとした表情や身振りを使い、注目させる。
- 意味の曖昧な言葉の使用をさける。(「適当に」「もう少し」等)
- いわずもがなのことを説明する。(「ほら、チューリップが咲いたよ。」ではなく、春の到来で嬉しい気持ちであることを明確に言葉で伝える。)

内部Webページの紹介 ▶▶▶ <http://192.168.6.10/>

今年も内部WEBページで教育情報の提供を行っています



今年度、新規に追加した教育情報を紹介します。

1 研修講座の講義を動画で配信しています

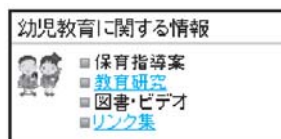
研修講座で来所された著名な講師の講義をはじめとする主な研修講座の内容を、いつでもこのページから視聴いただけます。



- 校内研修推進教員研修講座
「授業研究のマネジメントとプロンプターの役割」
- 特別支援教育指導講座（2組）
「自閉症についての理解」
- 心の教育に係る研修講座
「心のノート」の活用と心の教育の充実」
- キャリア教育講座
「キャリア教育のねらいと学習プログラム作成の考え方」

2 幼児教育のコーナーを作りました

TOPページに幼児教育のコーナーを作りました。今後、教育情報を充実していきます。



3 研修講座の概要を掲載しています

人権教育や平和教育等の教育課題に係る研修講座の要点をまとめ、資料化しています。教育課題の解決に向けて、参考にしてください。

■ 教育情報を募集しています ■

地域の教育用素材（写真やビデオなど）やビデオ録画した授業・保育記録を募集をしています。昨年度もたくさんのご応募をいただき、貴重な教育情報として内部 Web ページに掲載しています。

今年もたくさんのご応募をお待ちしています。

COLUMN

●コラム●

～ 学習指導要領改訂と「言葉」の力の育成 ～

約10年ぶりに全面改定される次期学習指導要領の基本理念をまとめた「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 審議経過報告」（平成18年2月13日）において、「今、子どもたちに必要なものは、学習や生活の「基盤」である。また、その際、「言葉」と「体験」を重視する必要がある。」と指摘されました。「人間力の向上を図る教育内容の改善」の基本的な考え方の最初に、「言葉や体験などの学習や生活の基盤づくりの重視」が示され、「言葉」の力の育成の重要性について、次のように述べられています。

言葉は、「確かな学力」を形成するための基盤であり、生活にも不可欠である。言葉は、他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための手段であり、家族、友だち、学校、社会と子どもをつなぐ役割を担っている。言葉は、思考力や感受性を支え、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤となる。国語力の育成は、すべての教育活動を通じて重視することが求められる。

このような観点から、義務教育修了段階において子どもに身に付けさせたい力を検討した結果、各教科等を横断してはぐくむべき能力として、例えば、次のような力が挙げられています。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する力（感性や想像力を生かす）
例：日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する。など
- ② 情報を獲得し、思考し、表現する力（言語や情報を活用する）
例：自然現象や社会的現象に関する情報や意見をグラフや図表などから読み取り、これらを用いて分かりやすく表現する。など
- ③ 知識・技能を実生活で活用する力（知識や技能を活用する）
例：衣食住や健康・安全に関する知識を生かして自分の生活を管理する。など
- ④ 構想を立て、実践し、評価・改善する力（課題探究の技法を活用する）
例：理科の調査研究において仮説を立て、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察をまとめ、表現したり改善したりする。など

こうした①～④の力は、現行学習指導要領においても、各教科等にそれぞれ位置付けられていますが、今後は、各教科等を横断して、学校教育活動全体で伸ばしていくことがより一層求められます。

教育センターひろば

● 研究員研究の紹介 ●

『所報82号』でお知らせしましたように、今年度は7名の先生方が研究員として1年間教育研究に取り組まれています。今回は、研究員の研究内容の概略をお知らせします。

国語科教育：児玉 敬子（中筋小学校） 小学校国語科においてことばを大切に、伝え合う力を育成する指導法の工夫に関する研究
道徳教育：野上 真二（日浦小学校） 道徳的価値の自覚を深めさせるための指導法に関する研究 - 「道徳の時間」の表現・交流を通して -
特別活動：岡田 由佳（三篠小学校） 自己の生き方を考え、実践していく力をはぐくむための学級活動の指導法に関する研究 - 自己理解を深める活動を通して -
特別支援教育：牛尾 泰久（己斐上小学校） 特別な教育的ニーズのある児童に対する支援に関する研究 - マネジメントサイクルに基づく個別の指導計画による実践を通して -
情報教育：宇田 昭史（古田中学校） 情報活用の実践力（判断・処理能力）を高める指導法に関する研究 - 中学校国語科における学習活動の工夫を中心に -
英語科教育：小茂田由美（美鈴が丘高等学校） 高等学校英語科における自由英作文の指導法に関する研究 - 読んで理解しやすい文章の要件の意識化を通して -
幼稚園教育：江村美紀子（船越幼稚園） 友達とのかかわりの中で幼児が自分らしさを発揮できるようになるための教師の援助の在り方について - 遊びの場面における幼児のよさの共化を通して -

● 広島市学校教育研究グループ活動奨励事業 ●

教育センターでは、先生方の少人数グループによる自主的な教育研究がより充実したものになるよう支援しています。具体的には以下のような支援をしています。

- ① 研究に係る奨励金の交付
- ② 研究内容・研究方法等についての相談
- ③ 研究内容に係る教育情報の提供

今年度は、8グループが次の題目で研究に取り組まれています。（平成18年6月～平成19年2月）

■ 言語技術能力を育てる授業展開の工夫 国語科授業を考える会
■ 聴く力、伝える力の育成を目指して - アサーティブな子どもを育てる - 吉島東AP
■ 新聞を授業で効果的に活用する方法を探る NIE フレンド シップ セブン
■ 国語科における読み取る力を伸ばす指導法に関する研究 落合東小国語研究会
■ 総合学習における国際理解学習の教材開発 国際理解研究サークル
■ 確かな学力を育む授業の創造 広島市立安佐南中学校研究推進委員会
■ 豊かな感性と創造性を育てる - 音楽活動を中心に - わくわく・うきうき研究会
■ 伝承文化であるわらべうた遊びを、保育に継続して取り入れる効果を探る（2年次） わらべうた遊びの研究

● 指導主事研究の紹介 ●

今年度、教育センターでは、研究協力校や研究協力員の先生方に、データの収集や授業実践等の協力をお願いしながら、以下の三つの研究に取り組んでおります。

研究主題	研究のねらい
担当指導主事 少人数学級における教育指導の工夫改善に係る実践研究Ⅱ	「少人数教育のよさ」を生かした教育指導のさらなる具体化を目指して、「少人数教育のよさ」が機能している場面における教師の支援について、児童生徒の様子と関連付けながら分析・考察し、「少人数教育のよさ」を生かした教育指導の要件を探るとともに、工夫改善の視点を明らかにします。
藤村 和彦 島本 圭子 正原 直行 山 領 勲	
授業研究ハンドブックⅢ（授業力を高めるための自己研修の進め方）	教員が自らの「授業力」を向上していくためには、個々の教員一人一人が、自らの課題を明確にし、その課題の解決に向けて自己研究・自己研鑽を重ねていくことが大切です。 そこで本研究では、授業力を高めるための自己研修の進め方について研究を行い、その成果をハンドブック形式にまとめて年度末に発行する予定です。
堂道 和雄 水ノ上 俊一 清水 剛晴 堂 鼻 康	
教育用コンテンツの開発・作成に係る実践的研究Ⅲ	情報機器等の授業活用の推進を図り、各学校の教育活動の充実に資するため、本年度は「映像化」をキーワードとして、中学校の国語科や技術・家庭科の技術分野及び、特別支援教育に係る教育用コンテンツの開発・作成を行い、年度末に内部Webページで公開する予定です。
住吉 磨 岩田 浩一	

題 字「所 報」… 広島市立亀崎幼稚園長 安永 智子
 表紙絵「ひろしま」… 広島市立本川小学校校長 奥原 球喜

編集後記

みなさまの研修・研究等のお役に立つことができるように、さらに努力していきたいと思っております。ぜひ教育センターを活用してください。

編集・発行／広島市教育センター

〒732-0068 広島市東区牛田新町一丁目17番1号
 TEL (082) 223-3563
 FAX (082) 223-3580
 E-mail: center@center.edu.city.hiroshima.jp
 外部Webページ：
<http://www.center.edu.city.hirosima.jp/>
 内部Webページ：
<http://192.168.6.10/>

広X6-2006-11(2)

